



さんぽ木だより

2018
夏号
vol.25

友の会会員の皆さまと記念館を結ぶ会報誌

たのしいひととき
秋のほととぎすとちかい
くるくるくるくと
まるいやさしいまをながく
夏のほととぎす
夜明けゆく川原で
祈つてみると
いろいろな空けくくれる
早稲穂の小道を
わたしの「ちや
たのしいひととき

(真民78歳)



重信川の夜明け

館長エッセイ

【第二十五回】

「思索ノート」の表題から
その想いを探る〈前編〉

真民詩を読み解く ②4

新聞のコラムに触発されて作る
「真民流」

記念館からのお知らせ

企画展「坂村真民詩集の扉書き
～真民が詩集に込めた想いと言葉～」

真民詩とわたし

花に引き寄せられる蝶のようです

みはら みか
三原 美加 さん

コーヒーブレイク

人間・坂村真民にスポット
ミュージカル「しんみんさん」
好評のうちに幕を閉じる

【第二十五回】心のうちをつぶさに記した976冊の記録

「思索ノート」の表題からその想いを探る

〈前編〉

坂村真民は、昭和26年7月から平成17年3月までの54年間にわたり、毎日の出来事に対する想いやその日読んだ本の感想、感動した部分の複写、手紙に対する想いと返事、詩の原稿等を、大学ノートにペンや万年筆でびつりと書き残しています。ノートの数は976冊にもなり、この記念館の収蔵庫の書架に大切に保存されています。

「思索ノート」には題名が付けられているのですが、題名にも真民の想いが込められており、その時々々の精神と置かれていた状況を反映した題名になっています。例えば、このノートはそもそも吉田高校に転勤となり、学校の近くの大乗寺で「参禅する」ことを決意し、その記録を書き留めるために書き初めたもので、1冊目から4冊目までは「参禅録」という題名が付けられています。

毎日の参禅記録として、何時に起きて何時から何時まで参禅し、老師から提唱を受けた時はその内容と自分の想いを細かく記述しています。

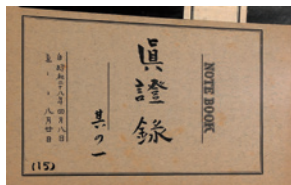
5冊目から9冊目（昭和27年3月から8月）までのノートの題名は「**照心録**」と付けられていまして、改名の理由として「白隠禅師が常に佛祖の経巻語録を座右に置いて、『心照古教 古教照心』の語を以て自己の箴誠とされていたという一句を頂いてである」と書いています。ノートの内容は、大乗寺での参禅記録と經典の解説書を写したものが多くなっています。

10冊目から14冊（昭和27年8月から28年3月）までの題名は「**サンマヤ日録**」と付けられました。真民は三瓶時代から吉田に移って以後も、個人詩誌として「ベルソナ」を発行していました。が、この時期に題名を「**サンマヤ**」に

変更しました。サンマヤ創刊号には「いま私は釈尊に支えられて生きるところまで漸く辿りついた。（中略）私の小さな詩誌サンマヤも偉大な人に捧ぐる私の貧しい散華である。」と書いていますが、大乗寺での参禅修行で釈尊により近づいたことにより、「サンマヤ」という言葉を大切にするようになったのだと考えられます。

この時期真民は、自分の部屋を「サンマヤ草堂」と名付けたり、点訳奉仕のグループの名前を「サンマヤグループ」と付け、「サンマヤ」（サンスクリット語で、真理、自由、平等という意味を持つ言葉）という言葉に思い入れがありました。

15冊目から30冊目（昭和28年4月から昭和30年10月）までは「**眞證録**」という題名が付けられています。最初のノートの表紙裏には、「幸くば佛信明した



まへ是我眞證なり」という嘆佛偈の言葉が書かれていますので、ここから採った言葉であると思われます。4月8日の降誕會の日に書き始められており、「大乘寺の本堂で「嘆佛偈」を唱え、仏縁のありがたさを独り淡々と思っていた。」とも書いています。この思いつから題名の変更になったと考えられます。

昭和30年10月から昭和31年4月までは、左目の失明に続き内臓の病気に罹り、学校を休んで自宅療養していましたので、ノートは中断されています。

昭和31年3月には病が癒えて、4月に宇和島東高校に転勤となり、ノートも再開されました。31冊目から38冊目(昭和31年5月から昭和32年7月)が「サンマヤ日録」という題名になったのは、ノートの中身が坐禅を中心にした記述に戻っていることも影響しているのではないかと思われます。

39冊目から41冊目(昭和32年7月から10月)は「サンマヤ行願録」と変更されています。ノートの最初の日に「このサンマヤ日録も今日からサンマヤ行願録とした。行願の意義を思え。願に生きるだけではない。実践するのだ。行為なくして何の価値があるのか。」と書

かれていますのが、理由だと思われます。

さらに、42冊目から45冊目(昭和32年10月から昭和33年2月)は「詩眼窟日記」と変更されています。41冊目のノートの最後のページに、「きょうからこの北窓しか開いてないわたしの部屋を新たに詩眼窟と名づけよう。この洞窟のような部屋でいくつかの詩をつくってゆこう。わたしはもともと洞窟が好きなのだ。サンマヤ堂よさようなら」とかかれています。

42冊目のノートには「四十二冊目のこのノートから詩眼窟日記とする。サンマヤ堂ともいよいよお別れだ。サンマヤというサンスクリットのもつ広大な意味が、ずいぶんわたしを成長させてくれた。ここから感謝しよう。詩眼窟としても、サンマヤの精神はますます堅持してゆくつもりだが、サンスクリットにこだわることはいけない。(中略)サンマヤ堂はどちらかと言えば吉田時代のものであった。ここに来てもう二年余になる。この二畳の屋根裏の世界から、何を創造するか。その気構えが、今ようやくよく熟したと言ふことが出来よう。詩眼は詩元だ。根源に肉迫しなければならぬ。」と書かれています。

46冊目(昭和33年2月)は「詩眼窟サ

ンマヤ堂日録」。47冊目(同年4月)は「詩眼窟サンマヤ日録」。48冊目(同年4月)は「詩眼窟サンマヤ日記」。49冊目(同年5月)は「サンマヤ・ノート」と1冊ごとに題名が替わっています。

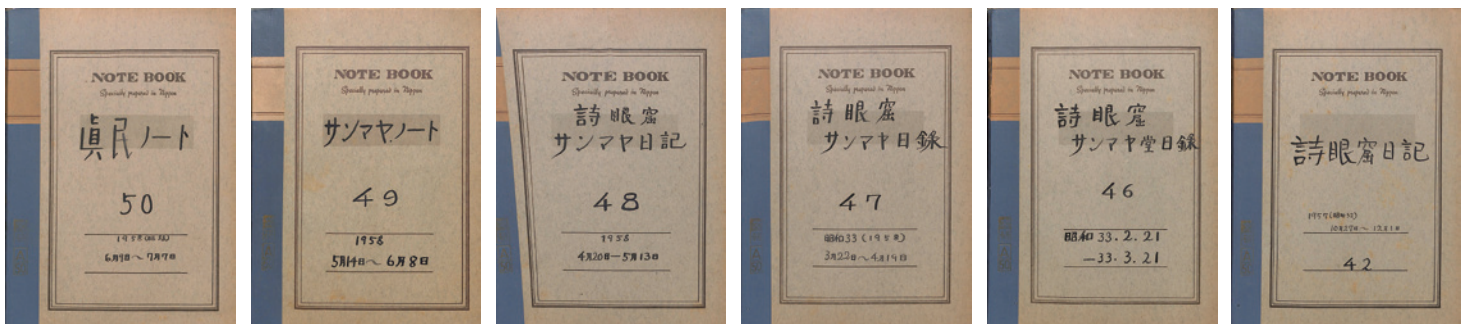
50冊目から51冊目(昭和33年6月から8月)は「眞民ノート」と変更されています。ノートには「サンマヤ堂も詩眼窟も銜(てら)った感じがしてならない。詩眼窟の標札もおそろう。」と書かれています。

この頃の眞民は、体調も悪く、精神的にも非常に不安定な状態が続いていたようです。

吉田から宇和島に変わって「大乘寺」という心の支柱を失っていたことも大きく影響しています。そうした生活の状態で1冊ごとに題名を変えている原因であると推察します。

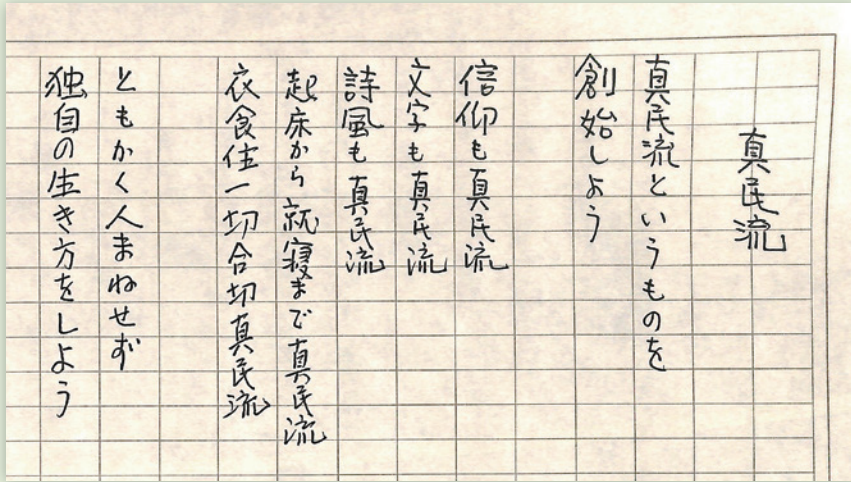
また、この年の7月30日に、学校へ自転車で通勤途中、バスをよけ損ねて側溝に落ちて、目の上を数針縫う大怪我をします。病院で手当てをしてもらつて、しばらく家で療養していたのですが、なかなか痛みが取れず、この「ノート」も8月から中断され、10月に再開されたのでした。

(続く)



新聞のコラムに触発されて作る

「真民流」



人生が始まるその年の1月23日に書かれています。これからの自分の生き方を、自分自身に向かって示している詩であると言えます。

この詩が作られた日の「詩記」には、京都・安泰寺の内山興正老師が「毎日新聞」に連載されていた沢木興道老師の「法句」の解説文の記事が貼り付けられ、その記事の下に「染まることはよくない。とくに染まって汚れることはよくない。サラリサラリとしていなければならぬ。できるだけ私は私流に生きたいと思う。」という言葉が書かれています。

この詩は、昭和42年真民58歳の時の詩です。吉田高校での最後の教員生活を終え、4月から松山での第二の

に感心したことを例にして、「不染汚」の難しさを書かれているのです。

真民は、この内山興正老師の記事に触発されて、この「真民流」という詩を作ったことが分かります。

また、心機一転、新しい土地での新しい生活が始まるのを契機として、「真民流」の生き方をしようという、真民の願いと決意が込められた詩であると言えます。

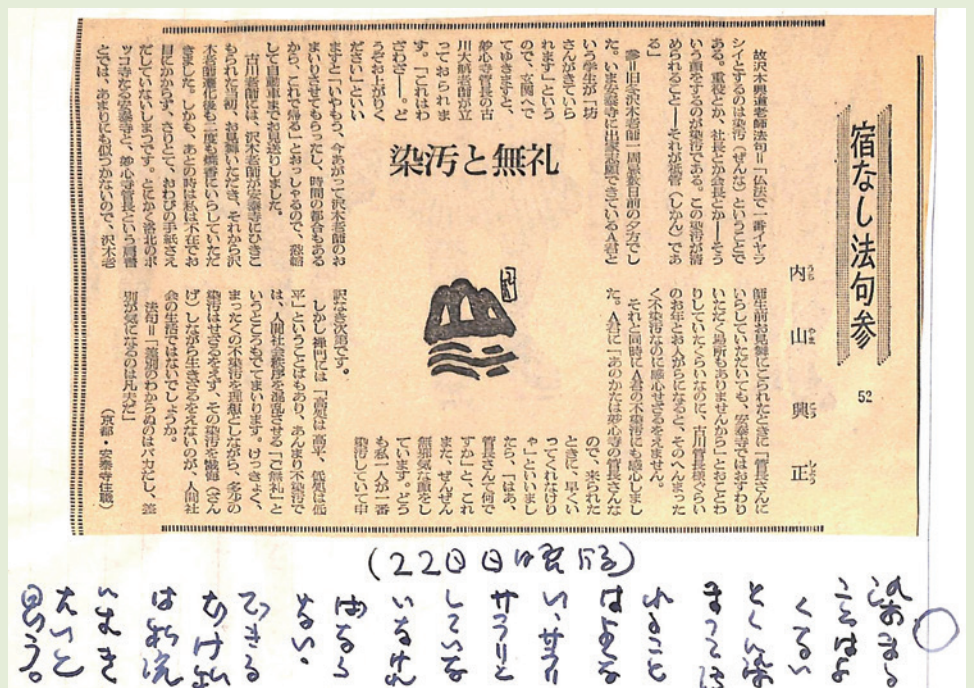
さらに、この詩の「ともかく人まねせず 独自の生き方をしよう」という言葉は、この後の真民詩によく出てくる「どんな小さな花でもいい。自分の花を咲かせよう。」という真民の生き方を最初に詠った詩なのです。

記念館からのお知らせ

企画展「坂村真民詩集の扉書き～真民が詩集に込めた想いと言葉～」

- 期間 平成30年 6月23日(土)～10月14日(日)
- 場所 坂村真民記念館

坂村真民は、すべての詩集と随筆集にその時その時の想いを込めた言葉を「表紙の裏」に「扉書き」をしています今回の企画展は、その「扉書き」について、真民直筆の書とその「扉書き」の言葉の出典となる「真民詩」を展示するとともに、「扉書き」に対する真民の想いと願いはどのようなものであったのかをパネルで展示しています。



花に引き寄せられる蝶のようです

三原 美加 さん(83歳)

真民詩を読む会「タンポポ会」が宇和島に誕生して、今年で30年になる。真民先生を顕彰する会の中で、これほどの長寿を保つ会は珍しいそうだ。同会のまとめ役である三原さんが、会の歴史や真民先生の魅力などを語った。



◆飾り気のなさに惹かれる

松山に暮らしていた昭和50年ころ、真民ファンだった知人に誘われて砥部のタンポポ堂を訪ねたのが、真民先生にお会いした最初でした。

詩の印象そのままの、「飾り気の無い純粋な方」という第一印象は終生変わりませんでした。著名な方なのに全く偉そうなところがない。そんなお人柄とともに、仏教詩人らしい敬虔さにも惹かれました。

平成元年に、高校教師だった平岡英樹先生の呼びかけで、真民詩を読む会ができました。宇和島とゆかりの深い真民先生の詩碑建立を実現するためにも、真民詩への理解を深めることが大切との思いからでした。平岡先生とは写経と座禅の会で一緒にしたもので、私も参加することになりました。

◆俳句にも通じる「無心」

一番好きな詩は、濁りのない無心な花に蝶は集うという「花無心」です。濁りのない心は「素直さ」そのもの。

俳句を始めて50年近くになります。最初、最初に師事した「洪柿」の佐伯巨星塔先生から真つ先にいただいた「俳句はひねるものではなく、素直な心で作るもの」という言葉に打たれた私は、以来、素直な心で句を作ること心がけてきました。その意味でも、無心を尊び、真剣に真民詩と向き合うタンポポ会での30年は、私の句に良い影響を与えていると思います。

◆詩によって磨かれる人柄

会発足の翌年、宇和津彦神社の上にある愛宕公園に「念ずれば花ひらく」の真言碑が建ち、翌平成3年には、吉田の海蔵寺にも建立しました。



平成2年、タンポポ堂にて



会のメンバーは現在10名。数年前まで、愛宕公園で掃除を兼ねたお花見を楽しんだ

タンポポ会は毎月1回、宇和島の泰平寺で開きます。泰平寺のご住職には当初から大変お世話になっており、感謝の言葉もあります。

会では『坂村真民全詩集』（全8巻）を一人1頁ずつ朗読します。現在、6巻目に入りました。朗読後に感想を語り合うのですが、脱線したり道草をくつたりと、とてもにぎやか。話があまり逸れると、「ずいぶん遠足したから、そろそろ宇和島に戻ろうか（笑）」なんて言いながら、話を引き戻すんです。

いつも、穏やかで明るい気持ちで帰路につきます。先生の詩によって、知らず知らずのうちに私たちの人柄が磨かれていくようです。こんな素敵な出会いをもたしてくださった真民先生に感謝しています。私たちは、真民先生という花に引き寄せられる蝶々かもしれません（笑）。



会員の手で海蔵寺に建てられた真言碑

人間・坂村真民にスポット ミュージカル「しんみんさん」 好評のうちに幕を閉じる

東温市の小劇場「シアターNEST」のこけら落とし公演として、4月29・30日にミュージカル「しんみんさん」が上演された(主催／アートヴィレッジとうおん、企画・制作／坊っちゃん劇場、協力／坂村真民記念館)。坂村真民の人生と詩をテーマにした唄あり踊りありの舞台は好評で、計4回公演のチケットはほぼ完売となった。

◆一流のスタッフが集結

東温アートヴィレッジセンター「シアターNEST」は、東温市が推進する「アートヴィレッジとうおん構想」の活動拠点として本年4月1日にオープン。共同事業体「アートヴィレッジとうおん」が運営管理にあたる。

「シアターNEST」のこけら落とし公演となったのが、坊っちゃん劇場の企画・制作、忠の仁作・演出、山本太郎・音楽による「しんみんさん」だ。

忠の氏は東京で数々のミュージカルや舞台への出演とともに、演出や脚本・訳詞なども手がけており、昨年、演出を担当した砥部町民ミュージカル「シンパシーライジング」は好評を博した。その後、「アートヴィレッジとうおん構想」に関わるために東京から移り住み、市の地域おこし協力隊の一員として芸術活動に携わっている。音楽の山本氏も、県内で数々の市民・町民ミュージカルに関わってきた。また、3人の出演者も坊っちゃん劇場所属と、こけら落としにふさわしい一流スタッフによる上演となった。

◆聖人君子ではない真民像を

忠の氏が真民さんをテーマにした経緯は、数年前、作詞や訳詞の参考にと購入した10冊ほどの詩集に坂村真民詩集が含まれていたことに始まる。「言葉の選び方、韻の踏み方、リズム感などがすごくいい。うまいなあ」。加えて、宗教詩人といわれるが、少しも宗教的なにおいがせず、深い内容を優しい言葉で綴っている。そんなところにも惹かれた。



真民詩との再会は、昨年の砥部町民ミュージカルがきっかけだった。演出の下見で砥部を訪れたときに真民記念館の存在を知り、それからは時間をみつけては記念館を訪ねた。西澤館長から詳しい話を聞くにつれ、芝居にし



(写真提供／アートヴィレッジとうおん)

たいという思いが膨らんでいったという。

こけら落とし公演が決まり、「よくいわれる聖人君子像ではなく、真民さんの人間的な魅力を描きたい」と、今まであまり描かれることのなかった少年時代のいじめのシーンなど、独自の視点で脚本を完成させた。

◆劇中劇に込められた詩の数々

66席という小劇場での約45分の公演は、架空の砥部町民劇団「ハムレットの独り言」の稽古場を舞台に展開する。

子ども時代に受けたいじめによって育まれた負けじ魂、「飯台」を買うことのできた家族の喜び、そして病床の妹を思う「かなしみはいつも」など、数々の真民詩が、歌と踊りを交えた劇中劇やセリフに織りこまれる。当初はちぐはぐだった3人の思いはしだいにまとまっていき、3人で記念館に行こうというセリフで幕を閉じる。

人間味あふれる真民さんが多彩な切り口で描かれ、客席と舞台が一体となった芝居に惜しみない拍手が贈られた。今回の公演を客席で見守った真民さんの長女・梨恵子さんは、「父は、自分が死んだら飛天となって、世界中を飛び回りたいと申しておりました。今日も劇場の片隅で嬉しそうに観ていたことと思います」と感謝の言葉を述べた。

忠の氏は、「真民さんの人生を45分で描くのは難しかった。この作品をもっと膨らませたい」と今後への意欲をみせた。

ミュージカル「しんみんさん」のあらすじ

砥部町民劇団「ハムレットの独り言」の団員3人が、演出家から坂村真民のことを調べるよう指示される。以前からその厳しい姿勢に憧れていた作家志望の田辺、真民さんを「愛の詩人」とみる女性団員の加納、そして「聖人君子みたいな人がテーマで面白い芝居ができるのか」と否定的な横尾。調査は難航が予想されたが、真民さんの人生と詩を見つめ直すことで、しだいに3人の気持ちがまとまっていくとともに、それぞれが新たな気持ちで歩み始める。

(タンポポだより編集部／太田)

※このミュージカルは、今後県内の学校への巡回公演が予定されています。各市町のホール等でも公演する計画がありますので、是非ご覧ください。



経営理念

最大の会社より最良の会社
人さまに喜んで頂く仕事と
自分づくりをする



プラザ本店

[パチンコ店経営]

株式会社 宣翔物産

〒812-0857 福岡市博多区西月隈3-6-17 Tel 092-475-1151

[関連グループ会社]

株式会社 クリオ

ホテルクリオコート博多
〒812-0012 福岡市博多区博多駅中央街5-3 Tel 092-472-1111



『木は氣なり』

百年の木には百年の氣が宿り

千年の木には千年の氣が宿る

鳩寿四 真民詩

南木曾木材産業株式会社

〒399-5302 長野県木曾郡南木曾町吾妻1187 代表取締役 柴原 薫

TEL 0264-57-4000 FAX 0264-57-2006 <http://www.nagiso.co.jp> メール kao@nagiso.co.jp

砥部の地で、医療、看護、介護の三位一体を実現する砥部病院



介護付有料老人ホーム To-be

78居室/20㎡～24㎡(1F&2F)



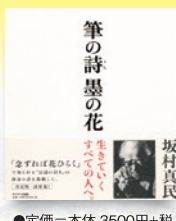
住宅型有料老人ホーム
モンレーヴ砥部

18居室/2LDK 40㎡～90㎡(3F)

伊予郡砥部町麻生51-1(砥部病院横) TEL.089-969-0085 砥部病院ケアサービス株式会社

サンマーク出版 坂村真民の本

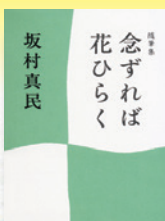
詩墨集
筆の詩墨の花



●定価=本体 3500円+税

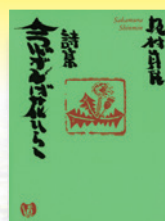
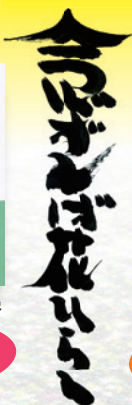
坂村真民記念館
所蔵の作品を満載!

随筆集
念ずれば花ひらく



●定価=本体 1800円+税

初めての
随筆集を復刻!



10万部突破の
超ロングセラー!

詩集
念ずれば花ひらく



詩集●定価=本体各1000円+税

サンマーク出版

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 2-16-11
TEL 03 (5272) 3166 FAX 03 (5272) 3167
<http://www.sunmark.co.jp>

いま届けたい、生き方の道しるべ



詩集二度とない人生だから

医療法人 徳真会グループ



医療法人
徳真会グループ

「医療は人なり」の診療理念のもと

患者さま第一主義の歯科医療グループです。

国内にデンタルクリニック32ヶ所、メディカルクリニック1ヶ所を展開し、
年間90万人の治療に携わっております。

徳真会 検索
www.tokushinkai.or.jp



坂村真民記念館友の会 会員募集中

坂村真民記念館友の会は、会員の皆様と記念館との交流を図り、記念館を共に支え、育てていくことを目的とした会です。入会された方には会報と、真民グッズなどの記念品を贈呈します。

パスポート会員 年会費2000円	特典 会員証で入館無料1人 ほか
一般会員 年会費5000円	特典 会員証で入館無料1人 ほか
特別会員 年会費10,000円	特典 会員証で入館無料2人 ほか
法人会員 年会費10,000円	特典 会員証で入館無料2人、観覧券10枚贈呈 ほか

詳しくはホームページをご覧ください 坂村真民記念館 友の会 検索

〈編集後記〉 次回の企画展は、「坂村真民詩集の扉書き」を特集しました。生涯(生存中)に真民が出した本は57冊あります。これらすべての本に、真民は精魂込めて「扉書きの言葉」を考え、タンポポ堂から発送するすべての本に墨で扉書きを書いて送りました。その「扉書きの言葉」の意味と出典を繙き、真民がその言葉に込めた想いを解説展示する予定です。皆様のご来館を心からお待ちしております。(西)

タンポポだより vol.25 夏号

平成30年6月1日発行 表紙写真：西澤孝一
発行元／坂村真民記念館友の会事務局
〒791-2132 伊予郡砥部町大南705 坂村真民記念館内
TEL089-969-3643 FAX089-969-3644

〔坂村真民記念館〕

開館時間／9～17時(入館は16時30分まで)
休館日／月曜(月曜が祝日の場合は翌日)、12月29日～1月1日
入館料／65歳以上300円、一般400円、高校生・大学生300円、小・中学生200円 ※15人以上の団体は割引あり